

Robert Browning の “By the Fireside” について

—— “one and infinite” を中心に ——

野 口 忠 男

は じ め に

“One Word More” の中で Browning は次のごとく歌っている。
“...no artist lives that longs not / Once, and only once, and for
One only, ...to find his love a language / Fit and fair and simple
and sufficient...” “By the Fireside” はもとより想像詩であるけれど、そこには Browning と Elizabeth Barrett との恋愛結婚の体験の薄衣が被せられてある。William Clyde De Vane も述べているごとく⁽¹⁾ 1853年、Browning 41歳の時、“true person” 「真実な自己」となって愛する妻にささげた心からの愛の賛歌と見てよいものである。1855年 *Men and Women* の第一巻に載せられたもので、Brook は「英国で夫婦愛について歌われた他のいかなる詩よりも素晴らしい。」と絶賛している。⁽²⁾ この小論では、二人の靈魂が一つに融合した秘密を各連を検討しつつ最終的に “one and infinite” 「一瞬にして永遠」の問題に焦点を当てて考えてみたい。

この詩の構成について James Fortheringham は ““By the fireside” is a little hard to read. Its hardness comes from its point of view and construction, and from the way in which story and description are worked in with and delay the main theme.”⁽³⁾ と述べている。要するに詩人が老境に達した時、炉辺に座しながら若き日、二人の靈魂が一つの “new stream” に融合した秘密を自ら回想する形式になっているのである。詩型については、Browning が得

意とする短歌のような短かい各連 5 行からなり、調子も弱強を基調とし静かな暖かい家庭的な調がみられる。まさに “the peace and satisfied joy of a married life at home with God and nature and itself.”⁽⁴⁾ である。最初の四行は、4-stress iambic に anapest を交えてあり、絶妙な晩秋の自然描写と老境と青春の心象が豊かな感性と深遠な思想とうまく融合している。最後の一行に 3-stress iambic trimeter を配置し、これが次連への橋渡しとして回想の流れをなめらかに進展させ、“one and infinite” の「善き瞬間」への緊迫感・流動感を高める効果は大である。

本詩を取り扱う上で便宜上、各連の関連を考慮して五つに区分してみた。Ⅰ番目は、第 1 連から第 6 連までの理想的な人生の秋に、ギリシアの書物に没頭する老人の姿と芸術美豊かな女性の国イタリアの描写。Ⅱ番目は、第 7 連から第 20 連で、青春の日、アルプス山脈の山中の晩秋の描写から人影もない寂しい礼拝堂への回想。Ⅲ番目は、第 21 連から第 30 連までで、炉辺の彼のかたわらに在る愛妻 Leonor に語りかけないではいられなくなり過去の回想から現在に戻り、靈魂融合を語り、心の陶酔を楽しみつつ、再度、愛の根源をたどって二人の愛の原点に戻ってみようとする。Ⅳ番目は、第 31 連から第 51 連に關してである。愛を告白する胸の痛みと人里離れた礼拝堂の回想に再度戻る。続いて、二人の靈魂が一瞬にして永遠を体得する場面でクライマックスに当る。さらに “one and infinite” がいかにして得られたかの反省と詩人の使命を語る。Ⅴ番目は、最後の 2 連で、詩人は回想から醒めて現実の自己に戻り再度妻に語りかける場面である。

I

第 1 連から第 6 連はこの詩の prologue に当る部分であり、全体を流れる Autumn の主要なイメージを構成する。“Fireside” には、二つの世界——内なる世界 (inner world) と外なる世界 (outer world) がある。内界と外界をさえぎるものは、老境においては、“shutters” (l. 8)、婚約結婚時においては、“screen” (l. 196)、“bar” (l. 233)、“mortal

Robert Browning の “By the Fireside” について

screen” (l. 235) である。老境の世界は落ち着いた内なる世界で、地上で体得した「愛・真・神」を再度認識する内なる宮である。第一連は “the long dark Autumn evenings”, “life’s November” に “the music of all thy (= my soul’s) voices” 「霊のかなでる声の音楽」つまり詩歌がすっかり聞こえなくなる時が来る。こゝで大切なことは、靈魂は Browning の詩精神の中核・詩魂をなすものである。彼は人間の精神的なものゝ根源に靈魂の存在を認め、靈魂がかなでる声の音楽が詩歌として生まれるのである。彼は老境の理想的世界を想像し、最も高度な精神的境地において青春の日を回想する意義を述べるのである。老境に相応しい晩秋のイメージを駆使し、外界の自然と老境の落ち着いた調和された世界を描き出す。

詩人は老境にふさわしく散文で書かれた “a great wise book” を丹念にめくり熟読玩味しながら読み進む。この書はおそらくギリシアの哲人か悲劇作家の英知の本であろう。こゝには Browning の精神の根幹をなすギリシア思想とキリスト教思想の融合された英知の世界が暗示されていると思える。実際に彼は予想通りギリシア文字に没頭したのであり、詩人の老境は幸福な落ち着いた高い精神生活である。なぜなら、“With whom beside should I dare pursue / The path grey heads abhor?” (ll. 104-5) のごとく最愛の妻が詩人の傍にいたからである。この “Ever fighter” のイメージは、“Rabbi Ben Ezra”, “Abt Voglar”, “A Grammarian’s Funeral” の中において、人生にあくことなく努力精進する態度が力強く歌われている。しかし外界は “shutters” を一枚隔てて荒涼とした横風が吹きすさぶ厳しい自然界の脅威であり人生の秋の重苦しさをひしひしと実感させる。(実際詩人は妻に先立たれ老境を一人孤独に暮す残酷な運命を無意識のうちにも感知していたであろうか?) (第2連)

次に老人と “the young ones” 「若い子供達」のコントラストが見られる。「若い子供達」とは一体誰を指すのであろうか? 空想に浸っている老人の脳裏を去来するものは、親しい近所の年若い子供達かも知れないし、又はこの詩が執筆された頃5才になっていた Browning 夫婦の一人息子 Wiedemann (愛称 Pen) を想起することも出来る。又は

Robert Browning 自身の幼少年時代を回想しているのかも知れない。とまれ、これらが混然一体となった年少者の総合されたイメージである。では“hazels”「はしばみ」の木はどのように考えたらよいであろうか？ 老境のイメージとして秋の夕暮れ時を用いる効果は大であるが、幼少年時代のイメージとして秋のはしばみの木を想像するのは好ましくない。第4と5連の関連からして、おそらくこのはしばみの木は幼少年時代を代表するに相応しい新芽を吹き出した春の若木を象徴しているのであろう。では“creek”「小川」は何を暗示しているのだろうか？ すなわち水で代表される小川は？ おそらく、清く美しい水の流れは、幼少年時の美しい「時」の流れを暗示し、詩人の郷愁を引き起さないではおかない。老人の心の底にコンコンと流れている心のふるさと、生命の源泉の清流ではないだろうか。(第3連)

私達は、老人のギリシア語の書籍を熱心に読んでいる表面的な意味の背後に、ギリシア文化に傾注した青年 Browning とのコントラストが見られるように思える。木（おそらく第3連との関連からしてはしばみの木が考えられる）のイメージを用いて代表されるギリシア文化は、大きくギリシアの世界に枝葉を伸ばし、さらに広々と果てしなく広がり、見通しのきく一筋の並木道となり、詩人は視界のきく並木道の果てるあたりをくまなく渉猟する。この並木道はさらに次の連の緑の国ローマへ至るのである。こゝでのギリシア文化とは、古代ギリシア文化がマケドニアの王 Alexander the Great (356~322 B. C.) の遠征によって四方八方へ拡大したと歴史的解釈を加えることも可能である。が立派な枝葉を伸ばした木で代表されるギリシア文化を熱心に研究する白髪老人の背後に、黎明期のギリシア文化を暗示しながらも、それがかつて深く広く学んだ青年 Browning の姿を彷彿させてくれるように思える。(第4連)次に“hazel-trees”のような大枝で豊かに被われ、しっかり骨組みされたギリシア文化の並木道が意味するものは、ギリシア文化が広く深く外の世界へ波及しながら、立派に組み立てられたことを暗示し、さらに老人の学問の深さとともに青年 Browning の思想の骨格が形成されたことも意味していると解することができる。“inside-archway”は枝葉の生い茂った並木道の内側の世界であり、ギリシア文化の思想的內容

Robert Browning の “By the Fireside” について

がアーチの骨組みの中ですっかり発酵している。このアーチ型をした並木道の前方には、幾多の物珍しい木々の国が待ち受けている。こゝで詩人は何ぞ、“arch”なる語を用いたのであろうか？二人が礼拝堂に渡る橋も“the one-arched bridge”なのであり、Ad de Vries によると“heaven, sanctuary, secret place”⁽⁵⁾さらに“triumph”の心象を内包していると言う。二人は聖地を通過し目的地の地へ向うのである。目的地の地とは二人にとってイタリアであり、礼拝堂であった。二つの持つ意義は、二人にとって誠に大きいものであり、“green”で象徴される緑なす木々の青春の国イタリアへ詩人と愛妻 Elizabeth Barrett Browning は踏み込むのである。Shellyにとってイタリアは、「流浪者の楽園」であった。Browning 夫婦が、1846年ロンドンを後にして、多大のギリシア文化の流入を背景に文芸復興が開花した地イタリアへ渡って来た希望と不安の道程を暗示しているとも言える。新緑の国イタリアは、二人の青春であり、二人の靈魂の源泉である。詩人は妻の手の確かな導きを信じ切ってやって来た。この詩に限らず、Elizabeth Barrett Browning を歌った詩篇では、妻を彼の魂の水先案内人のごとく賛美し信頼している。これを Browning の妻への甘えとかマザー・コンプレックスの裏返しと一口に割り切ってしまうことはできない。伝記作家の説を待つまでもなく、彼女の明晰にして繊細な詩才と深い愛情に Browning 自身どれ程魂の開眼をさせられたことか想像にあまりある。詩人は文芸復興発祥の地、偉大な芸術美の宝庫、女の国イタリアに思いをはせる。(第5連) 芸術美溢れる女の国イタリアに、北方の剛健で荒々しい園々が、求愛するが、美しい乙女は断固として承諾しない。イタリアは Keats の美神 Psyche のように“loveliest vision”「最も愛らしき幻」が相応しいのかも知れない。美しき緑の女の国イタリアは、暗に Elizabeth Barrett Browning を指すことも考えられる。逆説的ではあるが、彼女の秘めた胸の内は“My Star”や“One Word More”に見られるごとく、Browning にのみこっそり打ち明けられることになる。しかし、最後まで北国の雄者 Browning の求愛を拒むところに美女イタリアで暗示される Elizabeth Barrett Browning の靈魂の純粋性の高さを感じるとともに、それに憧れつゝも感謝の念を忘れた

い彼の人生態度の真摯さに驚くのである。そこには二人の愛の深い交わりがあったと思われる。この証明は、彼女の *Sonnets from the Portuguese* (1850) にあますところなく歌われている。(第6連)

II

“one and infinite” すなわち「時」と「永遠」の問題を解明する上で、第7連から第20連と第31連から第36連は誠に大切な箇所である。第7連から極めて美しい自然描写が始まるのであるが、新古典主義の立場に立つ批評家、Santayana, Babbitt, Lucus 等の厳しい Browning 論を待つまでもなく、確かに Browning には、時々耳をつんざく程の “energy” と “vitality” があり、耳ざわりで、抑制のきかない感情の流出が目立つ。彼の “barbaric, Gothic” で “the militant romanticism” の特性は、全面的に否定できないものがある。しかし Browning の詩人としての本質的特性を William O. Raymond は積極的に肯定している。

“...it is precisely the dash or verse of his poetry which constitutes its perennial originality and attractiveness. It is a strain running like an *elixir vitae* through his verse in its golden ear, giving it headiness and flavour. We are reminded of the violent rush of a mountain torrent frothing and seething amongst rocks and fretting its channel, but compensating for its lack of smooth rhythmical flow by the spin and dance, the spray and sparkle of its water.”⁽⁶⁾

Browning は “the infinite within the finite”, “thought and emotion” “intellect and imagination” の問題をいかに彼の靈魂の中で融合し得るのであろうか？ 彼の自然観照を考える場合、詩人の靈魂と自然がいかに関連し合ったのかを見逃す事はできない。Cook も Mr. Preyer も Browning の自然描写の “vitality” に対しては好意的であるが、“By the Fireside” に関しては本質的理由ではなく、“the spacing and selection of detailed description leave the im-

Robert Browning の “By the Fireside” について

pression of deliberateness⁽⁷⁾ がみられると主張している。事実、自然描写の一つ一つに “moment, one and infinite” 「一瞬にして永遠」を形成するために細心の注意を払って一連一連描かれている。William O. Raymond は次のごとき鋭き評言を加えている。

“Browning’s descriptions of nature are as impressionistic as his vistas of human life, and reveal to an equal degree his elemental property. There is occasional tranquillity in his landscapes, but as a rule this is the brief hush that follows or precedes a moment of highly wrought emotional tension.”⁽⁸⁾

ある青春の日、晩秋の巨大なアルプスの溪谷の心的風景は、遠近法を駆使し、宗教画的色彩を配置し、短歌的な短い語句の中に、自然美の真实性を余すところなく描き出している。Wordsworth の “a wise passiveness” でもなく Keats の唯美的な “Negative capability” でもない。Turner (1775～1851) でも Constable (1776～1837) でもない。自然の根底にある不変の秩序、生命を多角的視点を駆使し立体的躍動的に表現しようと努めた印象派的手法を思わせる。

はるかかなたの雄大なアルプスの溪谷の中腹に、荒れ果てた礼拝堂がみえる。私達はこの表現で一気に山間の静寂な自然の世界へ吸い込まれる。世俗的な塔か水車か鉄工場かが遠方脚下に見える。ここでアルプスの山々、その溪谷、とりわけ礼拝堂は何を象徴しているのであろうか？山は一般的に “the idea of meditation, spiritual elevation and the communion of the blessed.”⁽⁹⁾ また “heaven”⁽¹⁰⁾ のイメージがあるように聖なる場所であるとともに Browning 夫妻の靈魂が高く飛翔していくところでもあると思える。溪谷や礼拝堂の意味は後で明白にするつもりである。礼拝堂の描写は、第 14 連から第 20 連にかけて、さらに “moment, one and infinite” の直感的な体験が成就する直前の第 34 連から第 36 連にかけて詳細に描写されている。この礼拝堂のイメージを単独に追求する前に、二人が礼拝堂へと向って逍遙する時の主要なイメージを分析してみたい。第 8 連から第 13 連にかけて二人は “the heart of things” 「万象の中心」に立っている。ここで大切なイ

メージは、植物—“woods”, “lichens”, “ferns”, “the thorny balls”, “the creeper’s leaf”, “moss”, “mushrooms”, “toad-stools”, 動物—“a moth” (蛾のみ), 水—“The thread of water single and slim”, “torrent”, “the little lake”, “snow”, “showers”, “fairy-cupped”, “dew”, 道—“the ravage”, “a path”, 石—“From slab to slab”, “the straight-up rock”, “boulder-stones”, “the polished block”, 色—“dim”, “white”, “the evening glow”, “the silver spear-heads”, “Heaven in snow”, “the yellow mountain flowers”, “crimson”, “a splash of blood”, “gold”, “the rose-flesh”, “coral”, “fawn-coloured”。これらの各語の持つ詩的イメージを追求することは重要ではあるが、ここでは総合的イメージとして考えてみたい。これら各語のイメージは、晩秋の山中の寂寞とした世界を形成する諸要因となっている。と同時に二人が出合った頃の劇的な不安定な精神的状態を暗示しているようである。これらの形而下的な地上的な生気あふれるイメージは総動員されて荒れ果てた礼拝堂に集中していく。この二人の pilgrimage の心象に対して、Cook はいみじくも Dante の煉獄篇のイメージに言及している。“the precise outline of Dante’s *Purgatorio*: mountain with path encircling it, lake at the base of the mountain, heaven at its peak.”⁽¹¹⁾

次に私達は礼拝堂のあたりを詳細に分析し、礼拝堂の持つ意味をさぐらなくてはならない。第 14 連から 20 連にかけての礼拝堂の描写は大きく三分出来る。第一番目は、「はるかかなたの山脈へ曲がりつらなる正面の麓に立つ礼拝堂」の詳細な説明である。ここで注目しておくべきことは、細流の流れがせかれて池となった辺りにぶよが舞っている。そのところにある弓形の橋を渡って礼拝堂へ行くことである。弓形についてはすでに述べておいた。橋も礼拝堂も石造りである。細流がせき止められた辺をぶよが舞っている描写は、Keats の *To Autumn* の最後の箇所を思い起こす。秋の束の間の生の歓びを「悲しげな合唱」で歌い上げているぶよは、静寂な時間を超克し、現在性のなかに永遠の生命の真実の姿を見せてくれるかのように思える。すでに引用した、「茸」も「栗の実」も同じなのである。この微少なぶよの生命の中に Browning は自

Robert Browning の “By the Fireside” について

己の姿・青春の生のはかなさ生命の有限性を見たのではあるまいかと推測できる。弓形の橋は、礼拝堂に至る道の継続であるが、“the incide-archway”のごとく、この神聖な橋を渡ることは、煉獄の世界と天国との間を流れる細流で、現世の悪・罪を浄化し、清い姿になり変って、神の園とも言える魂の安息所へ至れるのである。つまり橋を境界にして手前は俗なる世界であり、前方には聖なる世界が暗示されているように思える。2番目は、聖日だけ炭焼き、麻を仕上げる人、樵夫、猟師たち12人の信者が礼拝堂に集い、その日だけ牧師が訪れて来る 素朴な場面である。形骸化した宗教の形式的教理とはほど遠い自然そのままの神聖な世界である。神聖な礼拝堂で祈りを通して神と結ばれる12人の人々の12という数字は暗に使徒を示しているのであろうか。そして、詩人と愛人の二人もその素朴な饗宴に参加を望んでいるのである。3番目は壁画の場面で、これは1569年と刻まれた古い建築様式の礼拝堂の正前にかかっている。それは風雪に耐えてきた「野に叫ぶ浸礼者ヨハネ」の絵である。このヨハネはキリストに洗礼を施した人であり、二人の愛人たちは、キリストと同じようにこの神聖な地でヨハネから神の命を施されるのであろうか。とまれ Browning はこのヨハネの絵に強烈な宗教的美的な衝撃を与えられたことは確かであろう。詩人は植物を多く駆使して視覚に訴えてきたが、こゝに動物として小鳥と一頭のさまよえる羊を描いている。小鳥が一日中さえずり、読者になごやかな聴覚的イメージを与えてくれる。聖なる礼拝堂の近郊にいる小鳥と池の辺で水を飲む羊とは何を暗示しているのであろうか？ こゝで、“a bird”は、“soul”⁽¹²⁾ “immortality” “the female principle”, “divine, messenger” から考えて暗に Elizabeth Barrett Browning を意味し、迷える羊とは聖書のイメージの濃いものであるが、楽しい小鳥のさえずりに救いと愛を求めてさまよう Browning その人に思える。第6連で妻の導きを絶対的に信じきっていた Browning と関連して来る。“My Star”ではないが、輝ける星で代表される愛人は常に頭上高く美しく清く存在しているのである。この礼拝堂であるが、過去のすべての秘め事—もろもろの事件、喜び、罪悪などを暗黙のうちに了解していると語る。これはいかなる意味であろうか？ 小林秀雄氏が「無常という事」で語っている

ように過去は、ありありと思い出さなければいけないのであろう。詩人 Browning は詩人として詩的直感により歴史の心に過去の現代性に触れているのである。

III

第 21 連から第 30 連にかけて最も大切なことは、詩人と彼の最愛の妻 Elizabeth Barrett との過去から現在さらに未来における二人の靈魂の触れ合いの実相である。二人が靈魂の深淵において何を感得したのかが問題である。語り手は、今までアルプス山中の回想に耽っていたのであるが、こゝで急に視点を換え、精霊のような小さい手で大きな額を支えている妻の姿を見つめ、言葉をかけずにはいられない衝動にかられる。Browning は妻に向かって Leonor と最上級の賛美の言葉で呼びかけ “My perfect wife” と彼女の完全性を誉めそやす。Leonor とは、ベートーベンのオペラ “Fidelio” の中の女主人公で理想の妻の名である。彼女の心も、眼もすべて彼のものなのである。

中心となる心象は、宗教的な神の心象、二人の青春時におけるもの、現在時点での炉辺のもの、老境と来世のもの、Elizabeth Barrett Browning 関するもの、語り手と妻の靈魂融合の心象とになる。こゝでは、Elizabeth Barrett Browning に関するイメージと二人の靈魂の融合過程のイメージを中心に考えてみることにする。これを考察することにより他のイメージ群も自ずと解明されて来ると思えるからである。なぜなら二人の靈魂の絶妙な働き、つまり靈魂の進歩の軌跡がこれらすべての鍵だからである。

語り手は妻をいかに表現しているであろうか？ “My perfect wife, my Leonor, / Oh, heart my own, oh, eyes, mine, too.” (ll. 101-2), “that great brow / And the spirit-small hand propping it / Mute-ly—” (ll. 113-5), “You are wont answer, prompt as rhyme;” (l. 117), “its (= her soul’s) fine flesh-stuff” (l. 120), “My own” (l. 121 と l. 126), “I must feel your brain prompt mine,” (l. 136), “Your heart anticipate my heart” (l. 137), “You must be just before, in fine, / See and made me see, for your part, / New depths

of the Divine!” (ll. 138-40). 以上のことから総合的に判断して考えられることは、詩人にとって Elizabeth Barrett Browning は、卓越した知性と繊細な感性、深遠な愛と絶妙な美の具現者、完全な理想の Leonor であったと言える。次にさらに重要なことは、二人の靈魂の問題である。第 21 連から第 30 連までのうちに “soul” が名詞として使用されているのは 3 回であるが、代名詞や指示語を合わせると全部で 6 回用いられている。(参考までに “heart” は 4 回使用されている。詩人は、“heart” の奥に存在する靈魂に興味があったのである。) これを各々コンテクストに基づいて分析してみると、(1)二人の靈魂の触れ合った初期の段階—自然現象の “mists” を用いた巧みな表現である。“At first, ’twas something our two souls/ Should mix as mists do:” (ll. 127-8), (2)現在二人の靈魂が融合して新しき一つの靈魂の河となる場面—“mists” のイメージから転じて「水」に関係している河のイメージを用いている。“...each (= each soul) is sucked/ Into each now; on the new stream rolls, / Whenever rocks obstruct.” (ll. 128-30) (3)融合した二人の靈魂は大地が破れ天国が開かれる時でも変わらないと確信を述べる。“..., when our one soul understands / The great Word which makes all things new— / when earth breaks up and Heaven expands— / How will the change strike me and you / In the House not made with hands?” (ll. 131-5)。語り手は最後の妻 Leonor に向けて 幸福な生活の喜びを深く感謝しないではいられなかった。「青春はむなしく見え」「幸多き老年」に続き、さらに祝福に満ちた死後の天上界までも妻となら進んで行けると確信を語るのである。ここに私達は Browning の靈魂の努力による発展の人生観を知るのである。とりわけ Elizabeth Barrett Browning の愛は、Browning の魂が発展する上で必要かくべからざる重要な要素であったと言える。第 30 連は注目すべき連である。美しい metaphor を駆使し二人で “the first of all” 全ての最初に立ち帰って、再度仲よく寄り添って、今を忘れて往時を回想しようとする。“Break the rosary in a pearly rain, / And gather what let fall!” “rosary” のイメージは “devotion, meditation, or inane repetition” から考えられるように宗教的なものである。数珠

の一つ一つは二人が歩んで来た愛の思い出の美しく純化された真珠の雨である。思い出の真珠の玉をまき散らして、新たな二人の魂の “perpetual continuity” から成る “the circle of perfection” を創造しようとする。

IV

第 13 連で語り手は “What did I say?” と再び、荒れ果てた礼拝堂の境内へと思いを馳せる。小鳥が一日中さえずり、大空を鷹が舞っている。鷹が象徴するものは “the intellectual intrusion which could disturb” のごとく、二人の愛を乱す知的な悪の妨害者なのである。夕方になるとあたりの静寂はますます深まり、詩人は胸が一杯になって内心の秘事をすべて語らないではいられない気持になって来る。この時の彼の心中はまさに “spiritual birth-hour”, “the crisis of his life” であった。二人の視点は荒れ果てた礼拝堂の外側から内部へと移動して行く。――消えかかった壁画、苔、小さな入口、粗末な扉、四角い窓の鉄格子、降された十字架、空の祭壇、いまは亡き建築師の付けた日付。この聖なる礼拝堂の内部をのぞき込む行為は、同時に秘密のベールで包まれた互いの心の深奥をのぞき込むことになりはしないであろうか？ 語り手は、彼の心の奥深くに「珍しい静かな銀色の光と闇」を見い出す思いがし、「言葉もなく喜びに胸がつまる。」のではないだろうか。

詩人はなぜこれ程まで礼拝堂の描写を行うのであろうか？ 詩人は、礼拝堂をのぞき “wish for our souls a like a retreat” (l. 169) と語る。一般的に言って、礼拝堂は聖・公・一 (holiness, catholicity, unity) の総合された聖なる場であり、「聖霊の宮」「真理の柱・真理の基礎」と言われ、信者たちが罪を悔い改め「信仰と希望と愛」を求め祈るところである。そして生命を得、静止的・保存的な Static な姿で日々を送るのでなく、「老人と海」のサンチャゴ老人のごとく “Every day is a new day” の精道でまたは Pauline の “Sun-treader, I believe in God and truth / And love” のごとく「神・真理・愛」を抱いて自己と他己の生命の発展に活動的に参与する dynamic な意味を含んだ祈りの場である。語り手と Leonor はこのような聖なる場で二人の靈魂

Robert Browning の “By the Fireside” について

の真実な交わりを強く希求したと思われる。

時は晩秋の夕暮れ、場所は神聖な古びた礼拝堂の森林の立ちこめる静寂なところ、二人のみ、今まで論述して来たすべての諸要因が今ここに結集したのである。さきほどの橋をまた渡ってもと来た道を引き返そうとした瞬間、目下恋愛中の二人は、強烈な自然と靈魂の融合の体験に触れるのである。D. H. ロレンスの「虹」でウィル・ブラングウィンが大伽藍の内を得た神秘的体験を思い起こす。

Oh moment, one and infinite !
The water slips o'er stook and stone ;
The west is tender, hardly bright .
How grey at once is the evening grown —
One star, thy chrysolite ! (ll. 181-5)

We two stood there with never a third,
But each by each, as each knew well,
The sights we saw and the sounds we heard,
The lights and the shades make up a spell
Till the trouble grew and stirred. (ll. 186-90)

この “one and infinite” 「時」と「永遠」の二元的な超えがたい両極の相矛盾する実相をいかに解釈したらよいのであろうか？ この靈魂の法悦状態、刹那即永遠、永遠の今 (The Eternal Now), 「時というものが突然止まってしまつて永遠に席をゆずる瞬間」すなわち「時」を超越した絶対的時間の世界を。Browning のこれに似た主観的想像的表現の例は “Abt Vogler” に見られる。Abt Vogler は、魂のない形式だけ立派な作品しか出来なかったのであるが、努力苦悶の後、次のような靈感の閃きを得たのである。

Novel splendors burst forth, grew familiar
and dwelt with mine,
Not a point nor peak but found and fixed its
wandering star ;
Meteor—moons, balls of blaze: and they did not

pale nor pine,
For earth had attained to heaven, there was no
more near nor far. (ll. 29-32)

この連に関して、三谷氏は「ブラウニング鑑賞」の中で誠に意義深い考えを呈示している。

「新しき光彩」“novel splendour”「遊星」“wandering star”
「流星」“meteor-moons”の閃きが、自然の内面にある無限とか、
永遠とか、神秘的力を暗示するものとして、それから無限、永遠、
神秘的力を属性としてもつ造化の神を象徴するものとしたのであ
る。この造化の神が、星の閃きのように天上を離れ、地上のヴォウ
グラーに近づき、その本質である永遠の生命をヴォウグラーの作品
に注ぎ込むのであると象徴的に表現したものである。これはブラウ
ニングが自然の内面にある見えざる力とか神秘的力をもつ造化の神
の姿を、自からの想像の世界に心象として描き、それを「新しき光
彩」「遊星」「流星」を通して見、自然の美に没入するよりは、自か
らの想像に没入していることを示すのである。⁽¹⁵⁾

そしてこの論理は、すでに引用した“Oh moment, one and infinite!”
に続く詩句にも当てはまると考えてよい。

詩人は透徹した「心眼」“inward eye”つまり Wordsworth の“an
eye made quiet by the power / Of harmony, and the deep power
of joy.”を持ってこの瞬時の“the life of things”「物の神髄」を見透
し、心象として描き「細流」“the water”「星一つ」“a star”を用い
て自己の想像の世界に入っている。Keats の“Negative Capability”
とは異なり、むしろ Wordsworth の“wise passiveness”に近いと
ころが感じられる。Wordsworth は“forms distinct / To steady
me”「心に落ちつきを与える瞭然たる形態」のものに興味を抱き愛した
が、Shelley は、“Intellectual Beauty”「知的美」を最高の美と考え
たのである。すると Browning は、Shelley の人の目に見えぬまゝ気
まぐれに漂う実体を具備しない不可視の力にも通じるころがある。
Eleanna Cook は“By the Fireside”を論じている中でこの“one

Robert Browning の “By the Fireside” について

and infinite” の様相を次のように述べている。

At the climax there is, in the well-known phrase, a double sense of time. All the while, chronological time, made by moving water, twilight, and grey evening, moves gently on. It says much for the strength of Browning's poem that time does seem both to stop and to move steadily on. The stream, for instance, has its sound cut nearly to silence as it slips down the rocks, and with such subduing it appears to become almost entirely visual and still like a stream in a painting. But we know it moves all the time. After two stanzas the experience is over and we are out of it, before we are hardly aware of what has happened. Reflections upon it begin.⁽¹⁶⁾

またこの偉大な瞬間の意義について、James Fortheringham は次のように述べている。

By the choice and event of that time he found his soul's faculty and meaning; he took his right place in life's order with motive and power to full it.⁽¹⁷⁾

詩人はまさにこの “one and infinite” の純粹な直感の体験により魂の根源を、愛の源泉を、力の礎を得たと言える。“one and infinite” の心象風景は、自然の純化された結晶体であり、自然の根源に横たわる実在の実相である。これはまさに Browning における “Beauty is truth, truth beauty,” であり、Wordsworth の表現を借ればかくのごとくなるであろう。

And I have felt

A presence that disturbs me with the joy
Of elevated thoughts; a sense sublime
Of something far more deeply interfused,
Whose dwelling is the light of setting suns,⁽¹⁸⁾

William Blake はいみじくも歌っている。“Without Contraries is no progression. Attraction and Repulsion, Reason and Energy, Love and Hate, are necessary to Human existence” がとりわけ「時」と「永遠」という相矛盾する両極の狭間に実存する人間は、「中間的存在」すなわち「両棲動物」“Amphibian”なのである。この二元的世界の矛盾相克に関して、F. R. Duckworth は“Time and Eternity”の中で次のように述べている。

The difficulties inherent in the conception of a timeless and spaceless Absolute are as old as the idealist philosophy itself, and have never yet been solved in a way which carried general conviction. Of Browning arrived at some solution satisfactory to himself, it is not anywhere expressed in his poems.⁽²⁰⁾

“Two in the Campagna”で“ Infinite passion and the pain / Of finite hearts that yearn”「限りなき熱情とそれを求める限りある心の痛み」は、有限の心の中に無限のものを捉えようとしても果すことの出来ない心の嘆きであり、“the good minite”「良き瞬間」を体得することが出来ないで終る。F. R. Duckworth が語るごとく“one and infinite”の“the good minute”つまり相矛盾する二元的世界をみごとに起克する反対の合一の原理は、Browning は詩のどこにも表現していないのであろうか。これに反論して、William Whitla は、キリスト教の受肉の神秘により二元的世界は一元的に調和出来ると主張する。(この件に関して大庭氏も「ブラウニング詩集」の中で論究している。)⁽²¹⁾

“...the “solution satisfactory to himself” was that only in terms of the Incarnation could he make sense of timeless reality and temporal existence. The problem of time in Browning is not primarily a philosophic problem; instead it is a religious mystery linked indissolubly with the Incarnation. The natural mystery of human love is the starting-point in Browning of an encounter with the Incarnation.⁽²²⁾

Robert Browning の “By the Fireside” について

“The natural mystery of human love” は、受肉という宗教的神秘を通して実現されると説く。

Browning は人間の精神的なものの根源、つまり無意識の世界の深淵に主体的な靈魂の存在を認めているのである。彼は *Sordello* (1840) の序文で “My stress lay on the incidents in the development of a soul: little else is worth study.” と靈魂の発達的重要性を述べている。この思想は “Cristina” の中に認めることができる。

Ages past the soul existed,
Here an age 'tis resting merely, (ll. 35-5)

Browning の靈魂の研究の使命について Lafcadio Hearn は次のごとく述べている。

Now all the purpose of Browning's work and life has been to show people what a very wonderful and complex and incomprehensible thing human character is—therefore to show that the most needful of all study is the study of human nature.⁽²³⁾

William Blake も同様なことを歌っている。“Man has no Body distant from his Soul; for that call'd Body is a portion of Soul discern'd by the five Senses, the chief inlets of Soul in this age.”⁽²⁴⁾

私たちは、Browning の人間の根源に内在する靈魂の問題を考えて見ることにより、主観的な人間性と客観的な外界の事物との相関関係、つまり詩人の靈魂と外界の自然との関連性が明瞭になると思える。

ここで私は「⁽²⁵⁾実在の本性について」と題するタゴールとアインシュタインの対談を思い出す。アインシュタインは問う。「あなたは神を、この世から遊離・超越したものとしてお信じになりますか。」これに答えてタゴールは語る。「神は世界から遊離・超越してはいません。人間の無限の人格性は宇宙を包含しています。人間の人格的存在によって包摂されえないものはなに一つ存在しません。そしてこのことは、宇宙の真

理はとりもなおさず人間的真理であることを証明しています。……。」さらに答えて、「わたしたちの宇宙が、永遠なものである人間と調和してあるとき、わたしたちはそれを真理として認識し、また美として感ずるのです。」これから明らかなように、タゴールは人間の精神の無限性は宇宙を包み、人間精神と宇宙とが詩的・芸術的直観によって認識されるとき真なるもの・美なるものを感じることが出来ると語る。タゴールの言う「人間の無限の人格性」とは、Browning 流に言えば“soul” 靈魂と言うことになる。ところでタゴールの「人間の無限の人格性」が宇宙を包含したように、Browning の靈魂も自然を包含するであろうか？さらにタゴールの言う「永遠なものである人間」と宇宙が調和するとき、Browning においても同様に、それを真理として認識し、美として感ずるであろうか？

論を具体的に進めるために、すでに引用した第 37・38 連と最も関連のある第 47・48・49 連を引用し分析してみよう。

A moment after, and hands unseen
Were hanging the night around us fast.
But we knew that a bar was broken between
Life and life; we were mixed at last
In spite of the mortal screen. (ll. 231-5)

これは愛する人の“a word”で詩人の空しき心が完全に満され、二人の心(heart)は一つになった、しかし、二人の間には影のような第三者が付きまとい靈魂の完全な一致の境地が達成されなかった。詩人は nearness ではあきらまず、二人の生命、靈魂と靈魂の identity を欲し、ついに“the mortal screen”「肉体の壁面」があるのにもかかわらず二人の靈魂は一つの靈魂となったのである。その主要な要因について詩人は歌うのである。

The forests had done it; there they stood —
We caught for a second the powers at play;
They had mingled us so, for once and for good,

Robert Browning の “By the Fireside” について

Their work was done — we might go or stay,
They relapsed to their ancient mood. (ll. 236-40)

二人の靈魂の合一は、森に象徴される自然の神秘的な偉大な力によって実現されたと詩人は、“one and infinite” の靈魂の法悦状態から覚めた姿で語る。確かに詩人の靈魂に自然の内に潜む靈的な神秘的な力が働きかけ、詩人の靈魂を自然の内面へと向かわせたのである。森で代表される自然の不思議な要因について、James Forthingham は様々な素因を取り上げている。

.....that moment, “one and infinite,” seems to blend with the evening and the scence, giving and getting depth and colour. The intense twilight, followed by the tender evening, the one star, the sense of the two souls near each other and far from all besides, the lights and shadows of sky and woods, the stir and trouble of hope and fear, the crisis of speech, the gentle-hearted acceptance, and the moment after when the night fell, and they knew their hearts one.⁽²⁶⁾

詩人は外面的な自然の奥深くに潜む肉眼では見られない不可思議な力の様々な要因を、理智ではない直感 “intuition” と靈感 “inspiration” とによって把握するのである。つまり、「人間の無限な人格性」は自然を包含したと考えてよい。この時詩人は、宇宙の真理、美を認識し感じているのであろうか？

How the world is made for each of us!
How all we perceive and know in it
Tends to some moments product thus,
When a soul declares itself — to wit,
By its fruit — the thing it does! (ll. 241-5)

二人は宇宙の摂理の真実なること・美なることに驚嘆する。タゴールの言葉を借用すれば、「わたしたちが真理と呼んでいるものは、^{リアライ-}実在の

主観的な面と客観的な面との間の合理的な調和のうちに存在しています。そして、その両者ともに個を超えた人間にそなわっているのです。詩人 Browning は、個としての存在の中に、「超人格的な人間性、すなわち普遍的な人間精神」を融合させることが出来たのである。それも主観的想像的に“one and infinite”「一瞬にして永遠」を直感したのである。詩人の靈魂の一瞬の閃きについて“Cristina”の中で次のように述べている。

There are flashes struck from midnights,
There are fire-flames noondays kindle, (ll. 25-6)

さらに“Pippa Passes”の中で Sebald と Ottima の不倫の愛の場面に風雨荒れ狂い、雷電鳴りわたる森の描写は印象的である。

Swift ran the searching tempest overhead;
And ever and anon some bright white shaft
Burned thro' the pine-tree roof, here burned and there,
As if God's messenger thro' the close wood screen
Plunged and replunged his weapon at a venture,
Feeling for guilty thee and me: then broke
The thunder like a whole sea overhead—(Part I ll. 191-7)

Browning の靈魂の閃きについて William O. Raymond は、次のように述べている。

In this fibre of thought, interwoven with ardour of temperament, lies the genesis of his verve and originality—that flash of life which I have singled out as the essential quality of his poetry.⁽²⁷⁾

彼の靈魂の閃光は、何か重大な危機的状况に直面した瞬間感情が極度に高まった時、衝動的に燃え立つのである。Browning には、内的生命の火の熱度が強かったのである。Browning の詩魂の源泉は、熱情的な気

Robert Browning の “By the Fireside” について

質と力強き思想を根底とした生命の閃光、靈魂の閃きであると言える。内的なものとの外的なものを統合するのは、この頑健な健全な生命力に満ちた靈魂のヴァイタル・フォースなのである。

主体としての靈魂と客体としての森で象徴される自然が、精神の靈魂の法悦状態において二人の靈魂と聖魂が融合し、永遠の相のもとに組み込まれる “one and infinite” の巨大にして深遠な詩的直感のメカニズムの思想的背景をどこに求めたらよいであろうか？ このことに関して Stopford A. Brooke は次のごとく述べている。

love of ideas for their truth and beauty ; love of the natural
universe, which is God's garment ; love of humanity, which
is God's child⁽²⁸⁾——

Browning の靈魂の世界には、真と美を憧れる理想愛、神の衣である自然への愛、神の子として人間愛が流れていたと語る。Dallas Kenmare も Browning の靈魂の核心をやはりキリスト教に求めている。

His Christianity was not a religion superimposed on his
personality ; in a very real sense, it *was* his personality. His
life was quite literally given to God.⁽²⁹⁾

“By the Fireside” だけでなく、幾多の他の詩も論究しなければならない訳であるが、Browning の精神の核心には、普遍的な、神秘的な、理性によっても理解されえない、言語においても表現されない絶対的真理・幻影があったように思える。キリスト教思想のみでなくギリシア思想も神秘的汎神論も包含してしまうような広大な豊かな生命的な思想の世界を具えていたのであると思える。これらの思想の微妙な千変万化の分離—融合—調知が、Browning の詩の一つの特質であると思える。

V

“one and infinite” で靈魂の偉大な果実を得ることが出来た詩人

は、自己の使命を確信を持って語る。一つは全人類の生命の進歩に貢献すること、二つめは、詩人としての地位と名声も定まったからには、終生妻を愛することを行なうと語り、詩人は完全に空想の世界から回帰して、自分達に人生の秋が実際訪れて来たとき、人生全体を考えてみようとする。本詩には、D. H. ロレンスが「息子と恋人」「虹」「恋する女たち」「チャタレイ夫人の恋人」を通して追求して来た愛を超える究極の實在に通じるものを読み取ることが出来る。

お わ り に

“By the Fireside” は、現実には二人の半生記の絶望と愛の道程である。詩人と妻 Leonor は今後、さらに礼拝堂の背後に高くそびえ立つアルプスの山頂めがけて靈魂の巡礼の旅を続けなければならない。なぜなら Browning にとって靈魂は不滅なのだから。最後に、この時空をみごとに調和した素晴らしい Browning の靈魂の奏でる詩的直感的 vision を強調しておきたい。

註

- (1) William Clyde De Vane, *A Browning Handbook* (New York, 1955), pp. 221-2.
- (2) Stopford A. Brooke, *The Poetry of Robert Browning* (London, 1902), pp. 249-50.
- (3) James Fortheringham, *Studies of the Mind and Art of Robert Browning* (London, 1900), p. 496.
- (4) Stopford A. Brook, *The Poetry of Robert Browning* (London, 1902), p. 250.
- (5) Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, (North-Holland Publishing Company, 1974), p. 21.
- (6) William O. Raymond, *The Infinite Moment and Other Essays in Robert Browning* (University of Toronto Press, 1950), pp. 9-10.
- (7) Eleanor Cook, *Browning's Lyrics: An Exploration*, (University of Toronto Press, 1974), p. 215.
- (8) William O. Raymond, *The Infinite Moment and Other Essays in Robert Browning* (University of Toronto Press, 1950), p. 13.
- (9) J. E. Cirlot, *A Dictionary of Symbols* (Routledge & Kegan Paul, 1976) p. 221.

Robert Browning の “By the Fireside” について

- (10) Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, (North-Holland Publishing Company, 1974), P. 329.
- (11) Eleanor Cook, *Browning's Lyrics: An Exploration*, (University of Toronto Press, 1974), pp. 217-8.
- (12) Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, (North-Holland Publishing Company, 1974), p. 47.
- (13) *Ibid.*, pp. 390-1.
- (14) William E. Harrold, *The Variance and the Unity, A Study of Complementary Poems of Robert Browning* (Ohio University Press, 1973), p. 103.
- (15) 三谷 正著「ブラウニング鑑賞」百華苑, p. 285.
- (16) Eleanor Cook, *Browning's Lyrics: An Exploration* (University of Toronto Press, 1974), p. 226.
- (17) James Fortheringham, *Studies of the Mind and Art of Robert Browning* (London, 1900), p. 497.
- (18) “Tintern Abbey,” by W. Wordsworth, ll. 95-9.
- (19) *The Marriage of Heaven and Hell*, “The Marriage,” by W. Blake.
- (20) F. R. G. Duckworth, *Browning Background and Conflict* (Archon Books, 1966), p. 161.
- (21) 「ブラウニング詩集」大庭千尋訳. 国文社 p. 407.
- (22) William Whitla, *The Central Truth* (University of Toronto Press, 1963), p. 149.
- (23) Lafcadio Hearn, *On Poets* (Tokyo, 1941), p. 210.
- (24) *The Marriage of Heaven and Hell*, “The Voice of the Devil,” by W. Blake.
- (25) 対談「実在の本性について」タゴール / アインシュタイン 森本達雄訳「ユリイカ」1971, Vol. 3-12, pp. 86-9.
- (26) James Fortheringham, *Studies of the Mind and Art of Robert Browning*, (London, 1900), p. 498.
- (27) William O. Raymond, *The Infinite Moment and other Essays in Robert Browning* (University of Toronto Press, 1950), p. 18.
- (28) Stopford A. Brooke, *The Poetry of Robert Browning* (London, 1902), p. 262.
- (29) Dallas Kenmare, *Browning and Modern Thought* (Haskell House Publishers Ltd., 1939), p. 172.

On "one and infinite" in "By the Fireside"
by Robert Browning

Tadao NOGUCHI

It is obvious that "By the Fireside" is one of Robert Browning's sacred poems containing the favour of his personal feeling that leads him to present the poem to Elizabeth Barrett as a sign of his wholehearted love. This paper attempts to clarify the resolution of Browning's spiritual crisis, the reconciliation of "time" and "eternity," in the course of his love affair with Elizabeth. In the development of his soul by their mutual love, I try to appreciate not only his real love based on Christian humanism, but also his poetic and imaginative vision of time and space in the "good minute."